『Dr. 宮城×Dr. 藤田　ジェネラリストのための　呼吸器診療勘どころ』

宮城 征四郎，藤田 次郎(著)

［評者］諏訪中央病院・内科　山中 克郎

豊穣な知識を持ちながら多くは語らない．それが私の憧れる指導医像である．患者さんへの慈しみと人間愛にあふれ，静かに一線を守り寡黙な風情を見せるほうが格好いい．

宮城征四郎先生が司会をされた症例検討会に参加させていただいたことがある．時系列に基づいた症状の変化と基本的身体所見の中で，何に注目すべきかを明確に示す大変教育的な診断推論カンファレンスであった．本書ではその教えが臨場感を持って迫ってくる．決して多くの知識を読者に与えるものではない．どの症状や所見が診断の絞り込みに重要であるかという診断推論のポイントが示されている．「疾患当てゲームではなく，どう考えどうアプローチするかという過程が重要」なのだ．

呼吸器疾患を有した15の教育症例が含まれている．最初に病歴と身体所見が担当医により発表される．「診療の勘どころ」では宮城先生や藤田次郎先生が，鑑別診断を絞り込む様子を見せてくれる．例えば，痰の性状で起炎菌がわかる．「鉄錆色(肺炎球菌)，イチゴゼリー状(クレブシエラ)，オレンジ色の粘稠痰(レジオネラ)」(p2)という情報を知っていることは臨床医の腕の見せどころである．「呼吸数が30/分以上となるなら病態は4つしかない(敗血症，低酸素血症，過換気症候群，呼吸筋の障害)」(p101)．こんな風に言い切れるなんて，なんと悠々として素敵なことだろうか．

さまざまな情報からどれが診断に重要な情報であるかを見極めること，数多く考えられる鑑別診断から可能性が高い診断へと一気に絞り込む方法は，実は非常に奥深い臨床的センスがいる技術なのである．

藤田先生の「画像診断のポイント」では特徴的な陰影とその分布から鑑別診断が導かれる．原著論文まで引用した「文献考察」も秀逸である．「Hornerはスイス生まれの眼科医で，Horner症候群の原著は1869年にドイツ語で報告されている」そうだ(p154)．40歳の女性について眼瞼下垂，縮瞳，眼球の軽度陥没，発汗低下という詳細な臨床所見を記載し，これが交感神経の異常であることまで指摘したHornerの洞察力に深い感銘を受ける．疾患が見つかった歴史的背景や科学的意味を知ることは楽しい．

また表や図を用いた，抗真菌薬の作用機序と各種真菌に対する効果のまとめ(p75)と，ガイドラインに基づいたアスペルギルス症に対する標準治療の解説が非常にわかりやすい．さらに喜舎場朝雄先生をはじめ，超一流の臨床医からのコメントも学ぶことができる．なるほど，そこに着目すればよいのか．

情報過多に陥っている研修医に必要なのは，重要ポイントを押さえた学習であろう．この本を手に入れて指導医としての人生を変えるという発想もありだろう．研修医だけでなく，もう一度呼吸器疾患を学び直したいベテラン医にもこの名著を推薦したい．

● B5／頁192／2014年／定価：本体3,800円＋税
［ISBN978-4-260-01979-8］医学書院刊

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2015

2026/10/13 18:50:14